

第41回 世界獣医師大会 2026(WVAC2026)を総括して

—ワンヘルスが示す未来への架け橋と学術プログラムの成果—

丸山総一[†] (日本大学特任教授)



はじめに

第41回世界獣医師大会 2026 (World Veterinary Association Congress 2026: WVAC2026) が、藏内勇夫日本獣医師会長を大会長として、2026年4月21日から24日にかけて東京国際フォーラムで開催された。日本での開催

は1995年の第25回横浜大会(杉山文男大会長)以来、実に31年ぶりとなる。本大会のテーマには、日本語で「ワンヘルスで世界の獣医療が示す未来」、英語で「One Health for a Better Tomorrow: Veterinary Medicine Holds the Key」が掲げられた。私は今回のWVAC2026のプログラム委員長という大役を仰せつかったことから、本大会における学術プログラムの編成プロセスと、その成果について総括したい。

まず、本大会のプログラムを組み立てるにあたり、近年にアジア圏で開催されたWVAC(2023年台北大会、2017年仁川〈インチョン〉大会)の動向やプログラム構成を把握する必要があると考えた。そこで、2017年の仁川大会でプログラム委員を務められた、ソウル大学名誉教授の木村順平先生に相談したところ、快くお手伝いいただけることになった。木村先生は日本人として初めてソウル大学の教授に就任され、国際的にも広く活躍されている。Asian Society of Conservation Medicine, 東アジア合同獣医学会, The Asian Association of Veterinary Schools (AAVS), Federation of Asian Veterinary Associations (FAVA) などを通じてアジア各国に強固なネットワークをお持ちであり、私にとってたいへん心強い助っ人となった。

私がプログラム委員長を打診された当初、深く考えずに引き受けてしまったが、後になってその職責の重さに大きなプレッシャーを感じるようになった。通常、この規模の国際学会であれば2年ほど前には開催が決定し、予算やコンテンツ・プログラムなどの準備を綿密に練り上げていくものである。しかし、私が委員長に就任してから開催までは、わずか9カ月というきわめて短い期間

しか残されていなかった。さらに、4月下旬という開催時期は、日本では年度初めの多忙な時期と重なる。企業・公務員獣医師の異動、臨床獣医師の狂犬病予防注射の繁忙期、大学関係者や学生達は新学期が始まったばかりで講義・実習などが重なるため、「十分な参加者を確保できるか」という懸念が常に頭をよぎっていた。とはいえ、引き受けた以上は、全ての参加者が満足できる充実したプログラムを構築せねばならないと決意を新たにした。

プログラム委員会、実行委員会の構成と編成プロセス

プログラム委員会は、委員長が私(丸山総一)、副委員長として日本小動物獣医学会副学会長の岡野昇三先生、委員長補佐として木村順平先生を迎え、総勢14名の委員で構成された(表1)。

31年ぶりの国内開催となる本大会において、メインテーマである「ワンヘルス」と「獣医療・獣医学の未来」という2つの大きな軸をいかにプログラムへ落とし込むかが最初の課題であった。このため、プログラム委員会を統括組織として位置づけ、その下で実質的な企画の創出と招聘講演者の選出・交渉を担う実行委員会を組織することを日本獣医師会に提案した。

海外からの多数の参加者を迎えることを見据え、①大会での講演や座長を英語で円滑に遂行できること、②ワンヘルスの理念を十分に理解し、日本の獣医療・獣医学の将来的課題を的確に提起できること、③海外から第一線級の講演者を招聘できること、の3点を重視した。その結果、国際経験豊かな現役の若手・中堅研究者及び海外在住の先生方を中心に実行委員をお願いすることとした(表2)。

具体的な大会のフォーマットについては、事務局と協議の上、従来のWVACの方式を踏襲することとした。すなわち、発表形式を「口頭発表」と「ポスター発表」に分け、口頭発表では数名の招待演者によるキーノート・レクチャーの後に、関連する一般演題の発表を組み合わせるスタイルを採用した。どのようなセッションを設け、どの演者を招聘すべきかについては、各実行委員の

[†] 連絡責任者: 丸山総一 (日本大学生物資源科学部)

〒252-0880 藤沢市亀井野 1866 ☎ 0466-84-3386 E-mail: maruyama.soichi@nihon-u.ac.jp

表1 WVAC2026 のプログラム委員会のメンバー

委員長	丸山 総一	(日本獣医公衆衛生学会会長)
副委員長	岡野 昇三	(日本小動物獣医学会副会長)
委員長補佐	木村 順平	(ソウル大学名誉教授)
委員	猪熊 壽	(日本産業動物獣医学会副会長)
委員	猪島 康雄	(日本公衆衛生学会副会長)
委員	上野 弘道	(日本獣医師会理事, 東京都獣医師会会長)
委員	荻 和宏	明 (日本公衆衛生学会副会長)
委員	佐藤 繁	(日本産業動物獣医学会会長)
委員	佐藤 真澄	(日本産業動物獣医学会副会長)
委員	佐藤 れえ子	(日本獣医師会理事, 日本小動物獣医学会会長)
委員	滝口 満喜	(日本小動物獣医学会副会長)
委員	田村 豊	(日本獣医師会理事, 北海道獣医師会会長)
委員	三角 一浩	(日本獣医師会獣医学術学会誌 編集委員会副委員長)
委員	森田 幸雄	(日本獣医師会獣医学術学会誌 編集委員会副委員長)

(敬称略)

先生方と連日のように Zoom 会議を開き、徹底的な議論を重ねた。特に、海外在住の先生方と議論を交わす際は、時差の関係から日本時間の 22 時に開始し、終了が深夜に及ぶこともあったが、委員の熱意によって乗り越えることができた。

なお、今回の東京大会は「第 43 回 日本獣医師会獣医学術学会年次大会 (令和 7 年度)」との同時開催であったため、国内学会側の特別講演や教育講演と内容ができるだけ重複しないよう、細心の注意を払う必要があった。さらに、世界獣医師会 (WVA) 独自のプログラムも並行して企画されていたが、その具体的な全容が判明するのが開催直前であったため、まずは WVA 側の大きなテーマとバッティングしないよう柔軟に枠組みを調整した。

本大会における RACE 認証の取得と意義

今回のプログラム編成において、学術的な充実度を高めることと並行して取り組んだのが、「RACE (Registry of Approved Continuing Education) 認証」の取得であった。RACE とは、米国獣医師会 (American Veterinary Medical Association : AVMA) が運営する継続的な教育活動を認証する制度であり、獣医師向け教育プログラムの内容や運営体制を審査し、一定の基準を満たしたプログラムを認証する仕組みである。認証を受けたプログラムは、米国をはじめ多くの国や地域において継続教育 (Continuing Education : CE) として認められ、獣医師の免許更新や専門資格の維持に活用されている。

表2 WVAC2026 のプログラム実行委員会のメンバーと担当分野

氏 名	(所 属)	担当分野
土井寛大	(森林総合研究所)	野生動物, Vector-borne Diseases
Alice Lau	(山口大学)	野生動物, Vector-borne Diseases
下田 宙	(山口大学)	コウモリ由来感染症, Vector-borne Diseases
中尾 亮	(北海道大学)	寄生虫, AI
林 慶	(Cornell University)	先端獣医臨床, 臨床教育
上田 悠	(North Carolina State University)	災害・救急獣医療, Pharmacogenetics
尾形庭子	(Purdue University)	動物行動学
松山亮太	(動物衛生研究所)	野生動物, Big Data と疫学
大沼 学	(国立環境研究所)	野生動物, One Health
James Chambers	(東京大学)	病理学, 法獣医学, AI
田中亜紀	(日本獣医生命科学大学)	法獣医学, Shelter Medicine
伊藤 聡	(鹿児島大学)	産業動物, 疫学, AI
鈴木一由	(酪農学園大学)	産業動物, 獣医学教育
松脇貴志	(東京大学)	獣医学教育
和田新平	(日本獣医生命科学大学)	Aquaculture, AMR
佐藤豊孝	(北海道大学)	AMR
戸上由香梨	(Ludwig-Maximilians-Universität München)	アニマルウェルフェア

(順不同、敬称略)

近年、新興・再興感染症への対応や動物福祉の向上、食料安全保障、One Health の推進などにより、獣医師に求められる知識は高度化・多様化しており、世界的に卒後継続教育の重要性が高まっている。国際会議においても、単なる学術情報の共有だけでなく、参加者の「継続的な専門能力の開発 (Continuing Professional Development : CPD)」に貢献することが強く求められるようになった。このような背景から、本大会では世界獣医師会大会として初めて RACE 認証の取得を目指した。これにより、本大会の教育プログラムが国際的な継続教育の基準を満たしていることが第三者機関によって客観的に認められ、参加者は学術セッションへの参加を通じて、国際的に認知された CE の単位を取得することが可能となった。各セッションの認証単位は表 3 に示すとおりである。

今回の RACE 認証取得の大きな意義は、世界獣医師会大会に新たな価値を付加した点にある。本大会が学術交流の場であると同時に、獣医師の CPD を支援する教育の場としての役割を明確に示したことは、今後の同大会のあり方に新たな方向性を提示するものとなった。本

取組みが、今後の大会における継続教育の充実を促進し、世界の獣医界における CPD の推進に寄与することが期待される。

テーマとプログラム内容の決定

各実行委員からは、現代及び未来の獣医療・獣医学を見据えた、きわめて刺激のかつ魅力的な提案が多数寄せられた。具体的には、ロボットや遺伝子技術を応用した先端獣医療、獣医学の各分野における人工知能（AI）やビッグデータの活用、欧米諸国における産業動物・伴侶動物のアニマルウェルフェアへの取組み、アジアと欧米の獣医学教育・認証制度の比較、感染症を生態学の観点から制御する「Disease Ecology」、コウモリ由来新興感染症、シェルターメディスン、法獣医学、再生獣医療、水産分野における AMR（薬剤耐性菌）対策など、今後の日本の獣医界において避けては通れない重要課題が網羅されていた。また、One Health をより広範な視点から捉える「Planetary Health」という概念が台頭していることなど、示唆に富む意見も多かった。加えて、東京大学構内に拠点を置く国際獣疫事務局（WOAH）アジア太平洋地域事務局の釘田博文先生にも協力を仰ぎ、詳細な協議を重ねた。これにより、牛や豚の越境性感染症に関するグローバルな視点を取り入れたセッションもプログラムに反映させることができた。これらの実行委員会から提案された内容をもとにプログラム委員会でも審議を行い、最終的に表 4 のような学術プログラムを編成するに至った。

また、各セッションの優秀な一般口演に対しては、発表者、特に若手研究者を奨励する目的から、賞を贈呈する仕組みも新たに導入した。採点にあたっては、プログラム委員及び座長に対し、抄録、発表内容、質疑に対する応答の 3 項目にわたる厳正な審査を依頼した。

なお、各演者・座長の日程調整や、講演内容から予測される聴衆の動線を考慮したセッション・会場の配置など、全体のプログラム編成には事務局とも連日のように検討し、多大な時間を要した。

大会期間中の様子と参加者の反響

4 月 21 日の開会式は、天皇皇后両陛下並びに敬宮愛子内親王殿下のご臨席を賜り、きわめて厳かに、かつ盛大に執り行われた。天皇陛下はご挨拶の中で、3 匹の保護犬と 4 匹の保護猫を家族の一員として迎えられたご自身の経験に触れられ、人と動物の絆や共生の大切さを改めて強調された。また、近年の地球温暖化やグローバル化に伴う人獣共通感染症の発生、生物多様性の損失といった深刻な課題に対し、ワンヘルスの重要性がかつてないほど高まっている点についても指摘された。さらに、動物の診療にとどまらず、家畜伝染病の防疫、公衆衛生の

表 3 WVAC 2026 におけるセッションと RACE 単位

日付	セッション名	CEU (単位)
4 月 21 日	KEYNOTE : One Health アプローチによる パンデミックインフルエンザの理解と制御	1
	動物福祉・動物行動学（小動物）	5
	牛臨床における高度輸液療法	5
	変化する世界における One Health : 新興感染症、環境汚染、そしてその先へ	5
4 月 22 日	越境性豚感染症の現状と防疫戦略	3
	動物福祉・動物行動学（産業動物）	5
	伴侶動物臨床の最先端医療 （循環器領域の革新／ロボット支援手術）	5
	AI とデータサイエンスの応用（感染症分野／ 畜産・バイオセキュリティ管理分野）	5
4 月 23 日	WVA : One Health Summit	6
	WVA : Animal Welfare Seminar	2
	WVA : Veterinary Education Seminar	2
	WVA : Medicines Stewardship Workshop	2
	水生動物における薬剤耐性： One Water の視点から	3

RACE : Registry of Approved Continuing Education

向上、安全な食糧の確保、環境保全など、獣医師が社会の多様な分野できわめて重要な役割を果たしていることに深い敬意を表された。

大会当日は、鈴木憲和農林水産大臣、小池百合子東京都知事、光石 衛日本学術会議会長らも参列し、それぞれ祝辞を述べられた。

開会式直後に行われた、北海道大学ユニバーシティプロフェッサー、人獣共通感染症国際共同研究所特別招聘教授統括等を務める喜田 宏先生による基調講演「Understanding and Controlling Pandemic Influenza by Means of One Health Approach」にも、天皇ご一家は終始ご熱心に耳を傾けられていた。

同日の午後からは、12 の会場で基調・招待講演、及び一般口演、ポスター発表が一斉にスタートし、各会場ではそれぞれのテーマに沿った発表と活発な議論が行われた（図 1、図 2）。私自身、大会期間中に全てのセッションを回することは叶わなかったが、時間の許す限り各会場へと足を運んだ。獣医学の各分野において AI やビッグデータをいかに活用していくかという近未来の課題をはじめ、日本ではまだ発展途上である救急獣医療やロボット技術を用いた獣医療、法獣医学のあり方や課題、動物愛護・福祉を感情論ではなくアニマルウェルフェアサイエンスとして科学的視点から捉える重要性、米国では、獣医大学とアニマルシェルターが連携して教育を行うシェルターメディスンが実施されていること、地球は水でつながっているため水系の AMR 対策は「One

表4 WVAC 2026 Program at a Glance (ランチョンセミナー, 年次大会のプログラムを除く)

4月21日(火)	
Opening Ceremony	
Keynote Lecture	Understanding and Controlling Pandemic Influenza by means of One Health Approach
Special Session ①	Public Lecture 「One Health×Sports ～“One Health” for “Sports”, “Sports” for “One Health”～」
Special Session ②	The Future of Companion Animal Medicine
Program3-1	Vector-borne diseases: From the perspective of infectious disease ecology
Program4-1	Well-being of Small Animals: Animal Welfare Science, Ethology and Ethics
Program5-1	WVA GA
Program6-1	Advanced Fluid Therapy in Bovine Practice

4月22日(水)	
Special Session ④	Special Symposium for Veterinary Technician/Nurse
Program2-2	Cutting edge clinical medicine for companion animals (Precision medicine for personalized treatment)
Program2-3 (1)	Cutting edge clinical medicine for companion animals (Cardiovascular Innovations)
Program2-3 (2)	Cutting edge clinical medicine for companion animals (Robot-assisted Surgery)
Program3-2	Current Status of Transboundary Swine Infectious Diseases and the Control Strategies
Program3-3	Current Status of Transboundary Ruminant Infectious Diseases and the Control Strategies
Program4-2	Application of AI and Data Science in Pathology and Infectious Diseases
Program4-3 (2)	Application of AI and Data Science in Animal Husbandry and Biosecurity Management
Program5-2	[WVA One Health Summit]
Program5-3	[WVA One Health Summit]
Program6-2	Bovine Respiratory Disease Complex
Program6-3 (1)	The Forefront of Soft Tissue Surgery in Calves a New Paradigm for Dairy Cow Health
Program6-3 (2)	A New Paradigm for Dairy Cow Health
Program7-1	Challenges to Veterinary Education Reform (US Clinical Education)
Program7-2	Challenges to Veterinary Education Reform (Skills Lab)
Program7-3	Internationalization of Veterinary Education: Efforts to Improve Standards in Asia
Program8-1	One Health for a Changing World: Emerging Diseases, Contamination, and Beyond
Program8-2	Innovations in Animal Welfare Science: Livestock, Zoo, and Laboratory Animals
Special Session ③	The Journey and Future Perspectives of the Asian Veterinary Training Program: Toward the Realization of One Health
Special Session ⑤	VetEd Asia 1
Special Session ⑥	Sustainable Urban Development and One Health

4月23日(木)	
Special Session ⑦ -1	Public Lecture One Health for Pets and Owners; Thanks Buddy!
Program1-5	Better Health, Better Welfare - Shaping the Future of Clinical Medicine of Companion Animal
Program2-4	Regenerative Veterinary Medicine
Program2-5	Disease Ecology of Wildlife
Program3-4	Current Status and Future of Vaccine Strategies Against Classical and African Swine Fever
Program3-4	Large Animal: Research presentation 2
Program4-4	Bat-borne infectious diseases as emerging and re-emerging threats
Program5-4	[WVA Animal Welfare Seminar] Professionals' Dialogue on Animal
Program5-5 (1)	[WVA Veterinary Seminar] One Health Education
Program5-5 (2)	WVA Medicines Stewardship Workshop
Program6-4	Recent Advances in Forensic Veterinary Medicine
Program6-5 (1)	Addressing Antimicrobial Resistance through One Health: From Global Frameworks to Local Actions
Program6-5 (2)	Antimicrobial Resistance in Aquatic Animals: A One-Water Perspective

4月24日(金)	
Special Session	Public Lecture One health: various initiatives and approaches
Program4-6	Emerging Threats of Avian Influenza
Program6-6	Addressing Antimicrobial Resistance through One Health: From Global Frameworks to Local Actions
Closing Ceremony	



図1 参加者と演者の活発な質疑応答の様子
(WVA Animal Welfare Seminar: Professionals'
Dialogue on Animal, 4月23日)



図2 大勢の参加者が熱心に聴講する様子
(Shelter Medicine, One Welfare in Companion
Animals, 4月24日)

Water」で考える必要があることなど、いずれ日本の獣医界が本格的に向き合うことになるテーマを直に聴講できた。これは私自身にとっても大変意義深く、これまで気がつかなかった多くのことを学ぶ貴重な機会となった。

4月24日の閉会式では、世界獣医師会（WVA）の会長に正式に就任した藏内勇夫日本獣医師会会長から、今後の世界の獣医療業界の発展と社会的地位向上に向けた力強い決意が示された。続いて、栗本まさ子日本獣医師会副会長から、今大会のコアテーマである「人と動物、環境の健康を一体で考える」理念を具現化した『WVA One Health 東京宣言』が読み上げられ、参加者全員でその方針が共有された。最後に、第42回大会の大会長となる Gustavo Moreno Degollado メキシコ獣医師会連盟会長が登壇し、次期開催地であるメキシコ・ユカタン州メリダの紹介があり、大きな拍手とともに大会のバトンが次回へと引き継がれた。

大会終了後、WVAのJohn de Jong 会長からは、「天皇皇后両陛下のみならず、これほど多くの閣僚らVIPにご参加いただいた大会は他に記憶がない。獣医師の日々の貢献について広く社会全体が理解を深める機会となったことは非常に素晴らしく、主催者である日本獣医師会に感謝したい。また、日本獣医師会のスタッフをはじめとした運営のホスピタリティも素晴らしかった。準備段階ではいくつか不安もあったが、大会全体を俯瞰すると大成功と言えるのではないか」との高い評価をいただいた。また、参加者からは以下のような好意的な声が多く寄せられた。

- 開会式で天皇皇后両陛下及び愛子内親王殿下のご臨席を賜り、陛下が挨拶の中で獣医師の役割や社会に対する貢献への敬意を示されたこと、また、ワンヘルスの実践の重要性に触れられたことは、わが国のみならず世界の獣医師の地位向上にもつながるものである。

- 日本国内ではまだ議論や実践の途上にあるテーマについて、海外での具体的な取組みや多様な視点を知ることができて、大変勉強になった。
- 人・動物・環境の健康を一体として捉える視点の重要性と、獣医師が社会で果たすべき役割を改めて深く考える契機となった。
- 日頃接する機会の少ない分野の最新の知見に触れることで、自身の視野が広がり、多くのヒントを得ることができた。
- One Health やアニマルウェルフェアに関するセッションの充実ぶりが非常に印象的であった。
- 最先端の臨床からワンヘルス、シェルターメディスン、さらには公衆衛生や大動物（産業動物）に至るまで興味深いセッションが目白押しで、一般的な分野別の学会では到底経験できない包括的な内容であった。
- 内容の切り口が鋭く、具体性に富んでおり、非常に興味をそそられた。
- 単なる臨床的な治療技術にとどまらず、獣医学教育やシェルターメディスンといったテーマが充実しており、これまで参加したどの学会よりも学びが多く有意義であった。
- 本大会で得られた学びと国際的な交流は非常に有意義であり、今後の業務や研究活動にぜひ活かしていきたい。
- 「動物の健康と福祉シンポジウム」を聴講し、日本の開業獣医師が抱える課題が世界共通のものであると分かり、非常に心強く、また興味深かった。
- 若手研究者として多くの学術交流ができて、きわめて有意義な機会であった。
- いろいろなセッションで、海外で活躍している日本人が多く発表していたことは、とてもよかった。若手にもよい刺激になったのではないかな。

一方で、一部の参加者からは今回の問題点として以下のような指摘もなされた。

- ポスター会場の照明が暗く、文字が読みにくかった。
- ポスター発表のコアタイムがランチョンセミナーの時間帯と重複していたため、質問者が少なかった。コアタイムの設定には配慮が必要である。
- 魅力的なプログラムが多い反面、同時時間帯に聴講したいセッションが重なり、取捨選択に苦慮した。
- 開催時期が開業獣医師の繁忙期と重なっていたため、全ての期間参加するにはハードルが高かった。
- 会場自体のアクセス（最寄り駅からの利便性）は良かったが、館内の構造が複雑で移動に時間を要した。
- 会場の規模が大きく、移動時間や各会場の進行状況を把握するのが難しかったため、複数の会場をまたいで聴講することが困難だった。
- 小さな会場で参加者があふれている会場がある一方で、閑散としている大きな会場も散見された。
- 獣医系大学の学生が少なかったように思えた。とても貴重な機会であったのに残念に感じた。

おわりに

開催時期、会場の構造やタイムスケジュールの重複、セッションごとの会場設定など、ハード面や運用における課題はみられたものの、「学術的・科学的な視点」から総括すれば、今回のWVAC2026は大成功であったと確信している。今回のメインテーマが示すとおり、「ワ

ンヘルス」は今後の獣医療・獣医学における核心的な概念として定着していくはずである。また、多くのセッションにおける活発な議論を通じ、わが国の将来の獣医療あるいは獣医学が今後向き合うべき課題がより鮮明になったと感じている。何より、国内外の若い日本人研究者や獣医師らが国際学会という大舞台で立派に講演し、また座長をこなし、堂々と活躍している姿を目の当たりにして、日本の獣医学の未来はきわめて明るいものであると確信することができた。

また、今回の大会の参加者のうち39名からRACEの申請があり、全員に証明書を発行・送付することができた。さらに、今回の一般口頭発表139題を審査した結果、最優秀発表賞(Most Outstanding Presentation Award) 8名、優秀発表賞(Excellent Presentation Award) 11名が選出され、それぞれに表彰状が送付された。

次回の世界獣医師大会は、2027年4月20～23日にメキシコ・メリダで開催される予定である。東京大会の熱量と成果が次期大会へと引き継がれ、さらなる盛会となることを切に願っている。

最後に、限られた時間の中でプログラム委員や実行委員の諸先生方との会議を重ねていただいたほか、協賛企業との調整、会場設営、プログラムの実質的な運営、さらにはWVA役員への対応や会期中の諸問題への迅速な対処など、多大なご尽力をいただきました(公社)日本獣医師会事務局の皆様、この場を借りて深く感謝申し上げます。